

科学的社會認識を形成する中学校社会科歴史的分野の授業開発

専攻 教育実践高度化専攻
コース 授業実践リーダーコース
学籍番号 M07273J
氏名 石井寛和

1 研究の目的

現代社会は、パソコンやインターネット、携帯電話の普及によって情報化社会となった。これにより生活を取り巻く情報が増大した。その結果、容易に必要な情報を獲得する環境ができ、生徒が無批判に情報を受容する態度の形成が進んでいる。無批判に情報を受容することは、誤解や偏見を含んだ情報をもとに意志決定を行う可能性を孕んでいる。適切な意志決定には、必要で正しい情報をもとにしなければならない。そのためは、情報を批判的に分析したうえで選択する態度の形成が必要なのである。

その一方で、学校教育における社会科歴史的分野では時間軸に沿った歴史教育が一般的である。これでは社会認識は歴史認識に限定される。歴史学習では、社会諸科学の成果に基づいた科学的社會認識が必要なのである。

以上のことから、本研究の目的は、生徒に批判的な視点から情報を分析させ、科学的社會認識を形成する中学校社会科の授業を開発することとする。

2 研究の手順・方法

本研究は以下の手順で研究を進める。

(1)科学的社會認識を形成する授業構成理論とは何かという視点から戦後社会科における授業構成理論を整理し、中学校社会科歴史的分野において科学的社會認識を形成する授業構成論を導きだす(第2章)。

(2)先行研究で導きだされた授業構成論をもとに実習校で実践可能な単元を設定し、授業モ

デルを設計する(第3章)。

(3)実習校において開発した授業モデルを実践し、授業モデルの問題点を明らかにする(第4章)。

(4)授業モデルの実践結果分析において明らかになった問題点を改善し、科学的社會認識を形成する中学校社会科歴史的分野の授業モデルを提示する(第5章)。

3 授業モデル開発

授業モデルの開発にあたっては、原田智仁の提起する理論批判学習を組み込んだ。この理論批判学習とは、生徒の認識の主体性を保証するとともに科学的社會認識を形成する学習論である。この基本的学習過程は、Ⅰ問題提起、Ⅱ仮説の発見・創造、Ⅲ発見・創造した仮説の検証及び修正、Ⅳ修正した仮説の応用によるその発展である。この時、発見・創造する理論とは、中範囲の理論である。つまり、個別理論と普遍理論との記述的秩序の間にある便宜的理論であり、普遍理論の一側面を扱う理論である。この理論批判学習の学習過程を、事象の原因・目的、あるいは法則を問う「なぜ」という問いと組み合わせ授業構成をするのである。

授業モデルとして、実習校での実践可能な単元から「欧米の発展とアジアの植民地化」(全3時間)を設定した。この授業モデルを開発する上で、原田の「産業革命」を参考にした。そして、この開発した授業モデルを実習校の第2学年の2クラスで実践した。

4 実践内容分析

実践内容を単元終了後、生徒に記述させたワークシートの解答内容から分析した。生徒の解答内容からは、「産業革命」の社会認識が因果関係によって構造化されていたことが読み取れる。そのため、理論批判学習を組み込んだ授業モデルによって科学的社会認識が形成されたと考えざるを得ない。その一方で、次のことが授業モデルの問題として明らかになった。第一は、授業モデルの開発段階において、それぞれの個別理論（イギリス市民革命、フランス革命など）や中範囲の理論（産業革命）の階層関係が明確でなかった点である。これによって、授業内容が羅列的になり、「欧米の発展とアジアの植民地化」の構造化が行われなかった。第二は、授業モデル「欧米の発展とアジアの植民地化」の授業構成において「産業革命」の比重が大きかった点である。これにより、生徒の社会認識は「産業革命」に関する内容に偏りを見せることとなった。第三は、筆者の技術的な問題である。つまり、発問の仕方、授業内容の提示などの授業展開に関する技術である。第四として、使用した事例・資料があげられる。つまり、個別理論や中範囲の理論を十分に説明する事例・資料がなかった点である。また、用意した資料について、客観的なデータが多く、逆に主観的記述のある文献資料（日記など）が少なかったことも問題点である。これらにより、生徒の批判的な分析が授業の中で十分展開されなかったのである。

5 改善モデル

授業の実践によって明らかになった問題から、次の点について改善した。なお、第三の問題である筆者自身の技術的な問題は、今後の課題として述べる。

第一の個別理論や中範囲の理論の意義が明確でなかった点と、第二の授業モデル「欧米の発展とアジアの植民地化」の授業構成において「産業革命」の比重が大きかった点については、中

範囲の理論の「近代化」を設定することによって改善した。個別理論や中範囲の理論の意義が明確でなかった点は、中範囲の理論の中に個別理論が位置づけられていなかったことにある。この授業モデル「欧米の発展とアジアの植民地化」において「産業革命」は、「近代化」の一つの側面であり、単元全体を説明する理論となっていなかったのである。そこで、富永健一の「近代化」理論を授業の中心に組み込むことで「欧米の発展とアジアの植民地化」全体を説明する理論とした。第四の使用した事例・資料については、「人権宣言」の原文など個別理論（イギリス市民革命、フランス革命など）を説明する事例・資料を追加した。さらに、地図を5点、詩を1点、文献資料を10点使用する。これにより、内容の吟味・検証の幅が広がると考える。さらに、詩から読み取れる情報を他の資料で検証するなど、生徒による批判的分析段階を組み込むことができた。

6 今後の課題

本研究では、中学校社会科歴史的分野の授業において、生徒に科学的社会認識を形成させるため、理論批判学習を組み込んだ授業開発を行った。

今後の課題としては、富永の「近代化」理論を組み込んだ授業改善モデルの実践を行い、その有効性を検証することである。授業で取り扱う事象や資料などの選択などの教材研究については、筆者自身まだまだ蓄積不足の部分である。これらの点を改善しつつ、理論批判学習を組み込んだ授業開発に今後も取り組んでいきたい。

主任指導教員 米田 豊
指導教員 吉水裕也